米国におけるメンタリング運動の誕生と発展の素描：ＢＢＢＳ運動を中心に

渡辺　かよ子

１．はじめに

本稿は20世紀の世界的メンタリング運動の中核として、その拡大発展を推進してきたBBBS（Big Brothers Big Sisters）運動の誕生と組織化の経緯を素描する試みの一端である。

メンタリングとは，成熟した年長のメンター（mentor）と若年のメンティ（mentee または protégé）とが基本的に一対一で継続的定期的に交流し，役割モデルと信頼関係の構築を通じて発達支援を行うものである。メンタリングには，日常的自然発生的なインフォーマルな類型と，プログラムを介した人為的制度的なフォーマルな類型（メンタリング・プログラム）がある[1]。メンタリング・プログラムは，①参加者募集，②スクリーニング，③マッチング，④双方への事前指導，⑤カウンセラー等の専門家によるモニタリング，⑥プログラム評価，から構成される。その特徴としては，①資格制度による市場独占をすることのない市民ボランティアを中心とする支援・助言であること，②メンターとメンティ双方に新たな出会いと生きがいを与え，メンターの示す役割モデルと善意がメンティの人生によき影響をもたらすこと，③専門家によるモニタリングが双方の関係性を支援すること，等がある。政策的メリットとしては、①低コスト、②高齢者を含む広範な人材の活用、③多セクター間の協力と多機能の融和、があげられる。

米国でのメンタリング運動展開については、Baker & Maguire が児童心理学との連関からメンタリング運動に対する賞賛と信頼の歴史的根拠の探求を行い、米国のメンタリング運動の歴史的発展段階として四つの段階を提示している。それらは、①発現：工業化と都市化が子どもの行動の問題と関係するようになり、こうした問題に心を傷める社会のメンバーが非行を予防ならびに措置を行うために、子どもや青年に介入する必要を認識し始めた段階、②確立：米国の最初のフォーマルなメンタリング・プログラム（例えばBBBS）を含む世話をする大人との関係性の提供を通じ、青少年を援助するために計画された慈善ユース・サービスの制度化と実施。③多様化：公共慈善事業から離れ、非行とその防止の科学に向けたメンタリングの新規構想への動き。④焦点：全国的組織や政策主導を通じたメンタリングの実践の支援増大と結びついたメンタリングの関係性とプログラムに関する増大する研究を通じ、メンタリングのプロセスに含まれる変数のより良い理解と鑑識、である[2]。本稿においては、これらの各段階において運動の中核となってきたBBBSに焦点を絞り、その誕生と組織化の経緯の概要を明らかにしたい。

米国のBBBSの歴史については、日本においては殆ど知られていない。BBBSのいわば公式通史としてBeiswingerの著書[3]があるが、日本においては所蔵されず、米国のBBBSに関す

る本格的な歴史研究も行われていない。本稿は「教育を越えるメンタリング」と称されるメンタリングという言葉の生成と教育史上の重要性を確認した上で、2004 年夏にフィラデルフィアの BBBSI（Big Brothers Big Sisters International）本部を訪問した際に閲覧させていただいた Beiswinger の著書、ならびに当時の関連資料を参照しながら、米国の BBBS 運動の誕生と組織化の経緯を素描したい。そうした作業を通じ、BBBS 運動の 1980 年代の転換とそれ以後今日に至る米国におけるメンタリング運動の興隆[4]がいかに連関しているのかを解明する端緒としたい。

2．教育史におけるメンターとメンタリング運動の重要性

「メンター」（Mentor）は、日本語ではメントル、メントール、マントールとも表記され、語源的にはギリシャ神話『イリアス』『オデュッセイア』に登場する英雄オデュッセウスの親友、イタケ島の高貴な家柄の老人の名前、固有名詞を意味する。メンタリングは、オデュッセウスが留守の間息子の後事を託したメンターと年少のテレマコスとの交流による発達支援関係に、その思想史的起源を持つ。『オデュッセイア』の第二歌に、メンターは「オデュッセウスのかつての僚友で、彼に家事万端を委ね、老父（ラエルテス）の命に従って、資産のすべてを無事安全に守ってくれと、頼んでいった間柄であった」[5]と記されている。メンターは、テレマコスの保護者兼教師の任を忠実に果たした。戦争終結後、テレマコスが父親を探す放浪の旅にでかけた時には、学問・技芸・知恵・戦争を司る女神アテナがメンターの姿をかりてテレマコスに付き添い、情念の誘惑から彼を守り、母への求婚者の殺戮に際してはテレマコスに父を助けるように激励した。メンターによる適切な指示と激励に導かれながらいく度かの危機を乗り越えたテレマコスは、未熟で我侭な少年から勇敢な思慮深く青年に成長した。それぞれの苦難を乗り越えた父子は、20 年後に再会する。

以上が今日一般的に知られているメンターとテレマコスに纏わる伝説の概要であるが、ホメロスの描いた『イリアス』『オデュッセイア』においては、メンターは殆ど登場せず、寧ろ女神アテナが主要な舞台回し役となってストーリーは展開していく。ギリシャ神話に登場するオデュッセウスの親友メンターを、「賢明で信頼のおける助言者」という普通名詞に転換し、今日の時代にまで受け継がれる西洋の発達支援伝説に仕立て上げたのは、フェヌロン（1651-1715）の『テレマックの冒険』（1699）であった。

17 世紀のフランスは、宗教改革以後、プロテスタント勢力を阻むための反宗教改革教育を推進し、『テレマックの冒険』の著者フェヌロンはそうしたカトリック側の指導者の一人であった。その教育原理は自然に逆らうことなく必要な支援を行うことにあり、『テレマックの冒険』はギリシャ古典に基づきながらキリスト教の教義の浸透をめざした教材として記された。『テレマックの冒険』は、フランス革命に至るまで少なくとも 200 版が印刷され、18 世紀フランスで最もよく読まれた作品となった。同書は 1699 年の出版直後に、ヘーグを始めとする外国でたちまち多くの版が出版された[6]。紳士教育で知られるイギリスのチェスターフィールド卿は 18 世紀に息子への手紙で「おまえの師（Mentor）の親切な心遣いと援助」という文を残し、固有名詞のメンターをよき師を意味する普通名詞としても通用するように使用している。1870 年代には Mentor は小文字で始まる普通名詞の mentor となったといわれ、同書の流行が、

フランス、それからイギリスで「賢明な助言者」と同意語になり、帝王教育に関する古典として今日に至っている[7]。

上記のような語源を持つメンターならびにメンタリングは、地域・学校・企業が連携した生涯学習・生涯教育体制の整備に向けた革新として以下のような理論的重要性を持つことが明らかになっている。①生涯学習・生涯教育における統合の理論的実践的実現、②地域コミュニティの紐帯促進ならびに社会的資本の増強、③学校を中心とする近代教育を本来の学びに立ち返らせる歴史的重要性、④「一人の力」による社会改革，行動的シティズンシップを志向する実践的教育学の提唱[8]、である。

1980 年代末に米国で興隆し世界各地に拡大しているメンタリング運動の中核が、百年の伝統を持つ BBBS 運動であった。この時期の深刻化する青少年問題に「一人の力」によって対応しようとする市民運動がメンタリング運動であり、それは、良質のメンタリングを確保するための厳格なメンターのスクリーニングと訓練、活動へのコミットメントに関する要求水準の高さに特徴づけられる BBBS のみでは対応しきれない青少年問題への社会的要請によって生じてきた草の根運動であった。以下ではこうした現代のメンタリング運動の中核となっている BBBS 運動の誕生とその後の組織化の概要を明らかにしていきたい。

３．ＢＢＢＳ運動の誕生（1902～1917）

１）前史：フレンドリー・ビジター運動

メンタリング運動の歴史的起源は、19 世紀末の米国で貧困家庭の子どもたちに役割モデルを提示したことで知られるフレンドリー・ビジター（friendly visitor)、ならびに 20 世紀初頭の非行少年少女の更正支援活動として開始された BBBS 運動（Big Brothers Big Sisters Movement,日本では通常 BBS と表記される）が行ってきた一対一（one man one boy）の支援保護活動にある。Big Brothers 運動は 1903 年にシンシナチー、1904 年にニューヨークでそれぞれ開始された。一方、Big Sisters も 1908 年にニューヨークで開始された。両者は 1977 年に合同し、Big Brothers/Big Sisters of America となっている。

BBBS 運動の前史として、フレンドリー・ビジター運動が１９世紀後半に開始されていたことが知られている。19 世紀後半から 20 世紀はじめにかけてのこの時期は、都市化と貧困問題への対応が喫緊の課題となり、「新」移民に向けられたアメリカ化運動ならびにプラグマティズム運動の胎動が始まっていた。都市人口は、1880 年には 28%、1890 年には 35%、1900 年には 40%、1910 年には 46%となり、1920 年には 51%となって、都市人口は農村人口を上まわり、1850 年から 1900 年にかけての大都市の人口増加を見ると、ニューヨーク（51 万人→34３万人)、ボルチモア（17 万人→51 万人)、ボストン（13 万人→56 万人)、フィラデルフィア（12 万人→129 万人)、シンシナチー（１１万人→33 万人）となっていた[9]。1900 年当時の米国全体の人口は 7600 万人、そのうち 14%が外国生まれであった。1885 年から 1890 年の間にニューヨークで亡くなった人々の 10%が貧民として埋葬され、ボストンの人口の 20%は実際に困窮にあえいでいたという。Hunter は世紀転換期の米国全体では、1000 万人、即ち全人口の 12%が貧困の状態にあったという[10]。1900 年当時の平均余命は白人が 48 歳、黒人が 33 歳、。4 人の子どものうち一人が 5 歳まで存命する可能性は 50%、半数の青少年が 21 歳になる

までに一人の親をなくしていた[11]。

1870 年代以降顕著になってきた都市部での貧困問題に対する一つの運動が、フレンドリー・ビジター運動であった。それは、移民の激増と都市化の進展する 1880 年代に、中・上流階級のボランティア（殆どが女性）を中心として、貧困問題を「施しではなく友情」によって解決しようとしたボランティア運動である。フレンドリー・ビジターはイギリスからの移民でプロテスタントの牧師ガーティン（Stephen Humphrey Gurteen）によって開始された。貧困の原因を当人の放蕩にあるとし、「今日の貧者が主に必要としているのは施しではなく、真の友情による道徳的支援である。」と説いた。1890 年代までに形成されていた全米 100 都市以上で慈善組織協会（charity organization societies）の地区監督者によって割り当てられたスラム街の特定の家族を、中・上流階級のボランティア（殆どが女性）が毎週訪ねた。1884 年には 10 万人に及ぶフレンドリー・ビジターが「優しさと秩序と光」と共に都市を潮流のように席巻していたという[12]。

しかしながらフレンドリー・ビジターはほどなく以下の三つの困難に見舞われた。第一は階層という、社会の超えがたい「溝」によるものであった。スラムの住人は助言や支援を自身の身近な友人や隣人、親類等に求め、恩着せがましい（とスラム住人には感じられた）外部者（＝フレンドリー・ビジター）を信じなかった。第二は、ボランティアの側の問題であり、十分な数の熱意あるボランティアを確保することの難しさであった。数千人といわれていても実際の活動を行っていたのは千人足らずであり、多種の家事負担に拘束される女性が時間のやりくりをしながら実際に活動できる時間は限られ、堅忍不抜の精神をもってこうした活動を行う女性の数も多数ではなかった。しだいにこうした訪問者を支援するために雇用された有償の代行者が直接こうしたサービスを行うようになっていった。第三に、こうした支援と関係性に活動の焦点をあてたフレンドリー・ビジターというアプローチの限界が、1880 年代から 1890 年代に米国を襲った経済不況によって明らかとなった。すなわち、貧者にとっての障害、貧者が真に必要としていたのは、心あるボランティアの善意や関係性以上に、貧困そのものからの解放であり、具体的には雇用問題の解消であった。こうした困難の中でフレンドリー・ビジター運動は終焉し、代わって、「ケース・ワーク」による「科学」に基礎づけられた専門職としてのソーシャルワーカーによる支援が展開されていった[13]。

2）ＢＢＢＳ運動の誕生①：シンシナチー

こうした動向を受けながら、20 世紀初頭には今日まで 100 年以上にもわたって継続される BBBS 運動の萌芽が、ニューヨークやシンシナチー等で形成され始めていた。BBBS 運動は、1903 年のシンシナチーの実業家ウェストハイマー（Irvin F. Westheimer, 1879－1980）の発意、1904 年にニューヨーク市少年裁判所書記官のクールター（Ernest K. Coulter, 1871－1952）の提唱、等当時のいくつかの草の根ボランティア活動から開始されている。従来、BBBS 運動の創始者はクールターとされてきたが、1974 年にＢＢＡ役員会において、運動の公式の始まりとして 1903 年のウェストハイマーによる飢えた子どもへの善行を認めることに投票が行われ、以後、運動の開始をウェストハイマー、組織的活動の開始をクールターに帰すという理解がなされている。

1903 年、オハイオ州シンシナチーにおいて当時 23 歳のウェストハイマーが今日の BBBS 運動に連なる活動を開始していた。ユダヤ系実業家、銀行家、慈善家であったウェストハイマーは、1903 年 7 月 4 日の独立記念日の朝、いつものように職場に赴き、ジェファーソンの「全ての人間は平等に生まれる」という言葉を思い出しながらふと窓の外を見ると、そこにはそうした言葉とは相反する光景が目に入ってきた。ホテルの裏のゴミ箱をあさる貧しい身なりの子どもの姿であった。その子どもは一かけの食べ物を二つにわけ、一つを自分、もう一つを傍にいた犬に分け与えた。この光景はウェストハイマーの心に触れ、「明らかにすべての人間は自由でもなければ平等でもない。私はこのことについて何かをしなければならない。」と考えるようになったという。ウェストハイマーはすぐに階下に赴き、その少年トムに声をかけ、散歩し、朝食をともにした。トムは貧しい母子家庭に育ち、既に何度も裁判所に呼び出され、住所は定まっていなかった。トムの友人は唯一その汚らしい犬であった。ウェストハイマーは、このようなトムを特別に世話し始め、家を訪ねたり、シンシナチーの野球チームの試合を観にいったり、けっして高価ではないちょっとした食べものや贈り物を与えたりした。トムとウェストハイマーは互いの興味や関心、トムの抱える問題について長時間にわたって話した。ウェストハイマーは、トムに新しい、よりよい生活に導き、トムもそれに快く応えた。トムガいかにそれまでの方向の定まらない生活を止め、真っ当な生活に落ち着いていくかを見ることは、ウェストハイマーにとっても大きな喜びであった[14]。

ウェストハイマーはシンシナチーの著名な Plum Street Temple のラビであるグロスマン（Louis Grossmann）ら 15～20 人に、こうした保護的な友情を結ぶよう説得し、活動が開始された。Jewish Settlement House（United Jewish Charities の支部）にさえ行けば容易にそうした交流を必要としていた少年を見出すことができた。こうした交流にあって、少年と大人たちが自らの特別な関係を表す言葉として用いられるようになったのが、Big Brothers ならびに Little Brothers であった。活動参加者はキリスト教徒ならびにユダヤ教徒の両方が含まれていたが、活動が Jewish Settlement House の近隣で行われていたため、大多数はユダヤ教徒であった。いずれにしろ、この段階から「一対一」（one man, one boy）の関係原理が確立されていた[15]。

1910 年には、ウェストハイマーは新婚旅行先のロンドンで世界最初のセツルメントハウスであるトインビーホールを訪れ、Elder Brothers と呼ばれる組織から BBBS 運動の原型を学んだ。帰国後の同年、ウェストハイマーは United Jewish Charities の地区監督者であった Boris D. Bogen らと共に 12 月 10 日、設立憲章を提示した。これを機に Big Brothers of Cincinnati は全くのユダヤ教徒の組織となった。その結果、プロテスタントが 1935 年に、カトリックが 1919 年にそれぞれの組織をシンシナチーに設立している[16]。1900 年当時のシンシナチーの人口約 33 万人のうち、ユダヤ人は 15000 人であった[17]。

３）ＢＢＢＳ運動の誕生②：ニューヨーク

一方、ニューヨークにおいては今日の組織的な BBBS 運動がクールターによって開始されている。オハイオ州コロンバスに医者の息子として生まれたクールターは 1893 年、オハイオ州

立大学卒業後、Pittsburgh Dispatch の編集者となった。1894 年に、ニューヨーク法律学校を経、1902 年に新設されつつあった少年裁判所の書記官に就任した。クールターは、少年非行の原因は本人よりも家庭や友人、社会にあり、我侭な子どもも周囲の支援や理解によって良き方向に意欲を示すことを認識し、子どもの権利擁護のための条例制定に尽力していた。時代の要請に教会が積極的な指導力を発揮すべきという超越主義神学者パーカー（Theodore Parker, 1810-1860）[18]の思想的影響の下、クールターは 1904 年にニューヨークの中央プレスビテリアン教会のメンズ・クラブで次のような歴史的演説を行った。非行少年たちはそこに集まった人々の隣人であり、責任であるとし、「もしここにいる各人が、劣悪な環境の犠牲者であるほんの一人の少年に関心を示し、彼の兄のような存在になれば、そのことは真の奉仕となるでしょう」という彼の提案は同席した 40 人の教会員に賛同され、これが Big Brother 運動の起点となった[19]。

ウェストハイマーとは対照的に、特にラッチキーと称された少年のメンターとしてのクールター自身の経験は辛苦に満ちたものであった。7 歳にロシアからアメリカに渡ってきたラッチキーは、1902 年には財布を盗んだ罪により裁判所に送られ、保護観察に処せられ、1903 年には再び財布を盗んだ罪により逮捕され、ニューヨークの青少年保護施設に収容されるが、逃げ出し、1904 年には再び逮捕される。この時、ラッチキーは 13 歳であった。以後、何度か再逮捕され、クールターを始め多くの人々が用立てた保釈金によって釈放、仕事の機会を与えられるということを繰り返すが、結局ラッチキーは行方不明となり、クールターとの関係も途絶えた[20]。

そうした心痛極まる経験を重ねながらも、クールターの BBBS 運動への信頼は不動であった。クールターの信念は次のような『日陰にいる子どもたち』と題された著作の中で次のように表明されている。「…我々は日々主なる困難は子供ではなく我々自身にあることということを学びつつある。BBBS の信念における主なる原理は、借家に住む子どもの状況は彼自身が作り出したものではないということである。彼が友人や援助者、あるいは国家の敵になるよう運命づけられているのかどうかは、概ね彼の隣人にかかっている。彼は形成の状態にあり、容易に影響を受ける。もしあなたが刑務所にいる子どもよりも開かれた空間にいる子どもの方がいいと考えるのであれば、あなたはその運動に共鳴している。もしあなたが援助をうけない子どもは、いつも不幸な環境の性癖を克服することができず、幸福と有用性を生み出す何らかの事柄なしには幸福にも有用にもなれないということを信じるのであれば、あなたは綱領に同意している。もしあなたがそれを必要とする子どもを援助するのに自身ですすんで何かしようとすれば、十分に食料を与えられていない身体と十分に発達していない精神から生活上の障害の何がしかを取り除くとすれば、あなたは価値ある奉仕をしていることになる。こうした業務がもたらす利益は、子どもにとって、それに従事する男女にとって、そして国の未来の市民精神にとって大いなるものとなるであろう。」[21]

クールターは当時の精神医学や心理測定の成果を認めながらも、精神科医とその偽者との違い、後者のもたらす害毒を痛烈に批判している。クールターによれば、「ケース・ワーク」や富める人々の金庫をこじ開けること、職の創出、専門職主義への渇望を伴う偽精神科医は、当時最も際立つソーシャルサービスに関連する局面であり、それは同一個人に同一の心理分析を

提示することが殆ど無い、いい加減で無責任な人々を魅惑しているという。精神分析家数と同数の分析と解釈がなされ、法廷手続きにおいては彼らの特異な目的に合わせた所見を書きたてている。煩雑な心理測定テストや瞑想、複雑な技術的質問の結果、「他の子どもと全く異なり社会から拒絶されるべき望まれない人間である」という結論が下され、それによる打撃から回復するのに数ヶ月もの根気強い、共感的努力を要した Little Brother は、賢明で分別のある Big Brother の指導と激励によって今や正常な個人となり成功しているという。クールターによれば、当時の精神医学の「教授」が、裁判所に召喚される非行少年は精神的欠陥をもち、虚弱精神がその主要因であるとしているのは、全くのでたらめであった。彼は当時の精神医学や心理測定がなした多大な貢献を賞賛しつつも、精神病院やソーシャルワーカーの増大に見られる現実や常識を無視した無責任な専門主義を厳しく非難している[22]。

クールターは、ニューヨークで始めての非行研究診療所の設立、米国ボーイスカウト協会(The Boy Scouts of America)、子どもへの残虐防止のためのニューヨーク協会（The New York Society for the Prevention of Cruelty to Children)等にも多大な貢献をなし、1934 年の英国子どもへの残虐防止のための国家協会（National Society for the Prevention of Cruelty to Children of England）の 50 周年記念祝典においては、カンタベリー大主教、ロンドン市長と共に主要講演者となっている[23]。1952 年のクールターの逝去に際してニューヨークタイムズ誌は次のような哀悼の辞を記している。「…彼が組織した少年を援助しようとする今日の全国的な運動は、1904 年のある夕べ、当地の中央プレスビテリアン教会のメンズ・クラブで演説を行い、それに市民の改善を研究することを止め、『それに関する何かをする』よう挑んだことに遡る。もし各々が法律に抵触したほんの一人の少年に個人的関心を抱けば、その人は何ものかをなしていることになるでしょう。」[24]

クールターの活動と並んで、Big Sisters 運動が 1908 年にニューヨークで開始されていた。その前史には 1902 年、Ladies of Charity（後にニューヨークカソリック BS に）がニューヨーク子ども裁判所から来た少女の支援開始していたことがある。中心人物は、Willard Parker 夫人と　W. K. Vanderbilt 夫人であった[25]。

BB 運動と BS 運動は、それぞれ連携をとりながら第一次世界大戦までに急速な拡大を遂げている。1904 年にニューヨークのプレスビテリアンの教会の 40 人の有志が開始した運動は、1909 年には 1000 人の LB がニューヨーク市の BB プログラムに参加するようになり、ニューヨーク市の BB プログラムは米国の数百の都市に拡大していると伝えらえる。1910 年には 20 都市の BB 組織が確認され[26]、翌 1911 年にはシンシナチーの BB は、当初 200 人が 400 人のボランティアに拡大している。1912 年には 26 都市の BB 組織が確認され、翌 1913 年には、オーストラリア、カナダを含む 40 都市で BB 活動が開始されているという。さらに第一次大戦中の 1916 年には、96 都市に BB 組織が存在したことが確認されている[27]。

1917 年には、米国内の 98 都市に支部ができたことが報告されている。また BBBS 運動はさらに外国にも広がり、それらの中でも最も盛況を呈しているのが東京であるとされる[28]。しかしながら、日本における BBS 運動が開始されるのは第二次世界大戦後のことである。日本の例からも明らかなように、種々の BBBS 運動の拡大に関する当時の新聞や雑誌記事の信憑性に問題なしとは言いがたい。

4）ＢＢＢＳ運動の理念と活動の実際

BBBS 運動の理念については、当初から子どもの内に存在する善に向かう能力への信頼があった。「...BB の精神は、その親が何であれ、すべての子どもの中にある善良に向かう生まれつきの能力への不滅の信頼に基づいている。いままでに咲いた最も美しい花も、もし乾いた、やせた、不毛の土で根を張ったなら、時が至る前に枯れるただの成育不全のものであるが、熟練した庭師が世話の下にある同じ植物は、その満開の香りで空気を満たすであろう。」[29]

こうした内在する善へ向かう能力を伸ばしていくためには、すべての子どもは友人や支援者を必要としていた。「どんな少年も、そしてあらゆる少年が、友人を必要としている。…少年は友人に代わる父母がいるかもしれないが、無関係の、家族以外の友人は、父母でさえあたえられない何かをあたえることができる。そして父親のいない子や母親のいない子、あるいは…、そう、彼はだれもがそうであるように BB という友人を必要としている。」[30]

そしてこうした友人の必要は、少年が必要としているのみでなく、それを支援するメンターである大人も必要としていた。「BB が SB の友人になりたいのみならず、彼は SB が彼の友人になってほしいと思っている。」[31]そうした双方に必要とされる友情、相互性からメンターも大きな喜びを得られるとされた。「偶々、この企てに参加する人は、彼が他人に提供する刺激となる彼自身の行為に際してのくつろいだ行為を通じて、独力で大いに得るのは確かである。」[32]

このような関係性、互恵性に基づく BBBS 運動の応募用件は、すでにこの時期に今日の原型が形成されている。当時、以下のような応募用件に同意することが要求されていた。「私は以下に示された Big Brother の責任を負うことに同意します。私は割り当てられた少年に少なくとも月２回、個人的に会います。わたしは彼の進歩の報告を、この目的のための用紙に書いて、毎月一日に書記長に提出します。私が彼の足跡を失った場合には、そのことについて直ちに書記に連絡します。」[33]

またこの時期すでに、一対一の個別継続的支援という特性を生かした「自らに応じた貢献」が明示されていた。「少年に関する毎月の報告の作成と時々会うことを除いて、BB は全く自身の方向に任されている。彼はある少年に友人になることを約束した上は、彼はそれをどのようにしようと自由である。」[34]また今日と同様、少年自身の興味関心を尊重した支援を行うよう、実際の活動指針と方法が示されている。

実際の活動と方法については、少年の興味あることに関心を持ち、職場や家庭に招いたり、野球観戦や演奏会に共に出かけること等が推奨され、これらは現代の BBBS 活動の原型をなし、百年の伝統として継承されている。また少年の適性や才能にも目を向け、それを発現する機会を設けることも推奨されている。

以上のような今日の BBBS の活動に受け継がれている理念と活動指針に基づく献身によって、この時期から BBBS 運動は多大な成果を生み出してきたことが知られている。例えば、「LB の 90%が大学進学し、多くは奨学金を得、後に法律にふれた者は１%以下」[35] であったという。ただしこうした成功事例が全てというわけではなく、前述のクールター自身のように、いかにメンターが努力してもうまくいかない場合があるのも事実であった。

しかしながら BBBS 運動の最大の成果は、少年（LB）が自ら BB となって LB の支援にあ

たることであった。「多くの Small Brothers が成長して Big Brothers になっていっている。Small Brothers が Big Brothers になっていくことほど、Big Brothers の働きが成功したという優れた証明はない。」[36]こうした世代間連鎖の重要性は、BBBS の会食等の行事のスピーチにおいても繰り返し強調されていた。「あなたがたはいつか大人になり、そのように行動するようになり、Big Brothers があなた方への関与を止める時には誰か他の少年の Big Brothers となっているであろうことを心にとどめなさい。今やあなた方の有利な点を悪用してはならない。市民があなた方を恥じることがないように。さもなければ Big Brothers は彼らがあなた方を援助したことを後悔することのないように。」[37]

４．第一次世界大戦以後のＢＢＢＳ運動

１）戦間期（1917～1944）：ＢＢとＢＳの組織的展開と BB/BSF

第一次世界大戦の戦中戦後、BBBS 運動は各地域でさらなる発展を遂げていた。1920 年には、ニューヨークの BB 運動が 1300 人の LB の支援を行い、1933 年にはそれが 1984 人の LB に拡大している。またこの時期、1940 年にはシンシナチーで 25 年以上の活動経歴をもつ BB が 101 人となって、BBBS 運動は着実に米国社会に根づきつつあった[38]。

このような各地での活動拡大にあって、最初の連盟である BB/BSF（the Big Brother and Big Sister Federation、1917～1937）が結成される。それまで各地区の交流はインフォーマルに行われていたが、1917 年に初めての正式な全国会議が組織され、情報や意見交換がなされるようになった。1921 年、BB/BSF（the Big Brother and Big Sister Federation）が結成され、会費は年間 10 ドルであった。しかしながら BB/BSF は 1937 年に解散に至る。

戦間期、それまでの各地域での活動に加えBB/BSFによる全国的活動が開始されていた1922年当時の全国的状況は次のように伝えられている。米国とカナダに 106 の BBBS が存在し、そのうち 50 が連合に加入していた。これらのうち 44 支部について、その基盤となっている宗派や集団を見ると、非宗派が 22、カソリックが 5、ユダヤ教が 11、プロテスタントが 4、黒人が 2、となっていた。当時 5289 人のボランティアが活動し、99 人の有給職員がそれを支えていた。53 人のボランテァイに 1 人の専門家の職員という比率になっている。

1921 年には、16110 人の子どもを支援したとされ、そのうち 68%は裁判所に召喚されたことのない子どもであった。子どもの年齢は 62%が 10 歳～16 歳、32%が 16 歳以上、6%が 10 歳以下となっていた。子どもと会う平均的な回数については月に 3.6 回となっていた。　各支部の子ども一人あたりの支出額は 10.66 ドルであり、各支部の平均予算は 7089 ドルであった。こうした活動を支える収入は、個人および支援組織からの寄付であった[39]。

さらに 1922 年には要求される最低基準の提示がなされていた。それらは次のような９項目からなっていた。①子どものためのボランティアの側での個別の個人的努力（一対一概念）、②業務行為における理にかなった効率と、物的人的両面での理にかなった十分な設備、③定期的会議あるいは他の満足な管理統制形態による活発で責任ある管理体、④他の効率的運営がなされている組織の業務との回避可能な重なりのないこと、⑤公共性・昇進・資金の懇請に関する倫理的方法、⑥地域コミュニティにおける適切な社会組織との相談と協力の合意、⑦詳細に分類され項目化された受領証と支出を示すよう準備された、毎年監査をうけた会計簿、⑧項目

化され分類された年間予算見積り、⑨連盟によって準備された質問紙に答える形での達成された業務に関する完全な毎年の声明[40]。

この時期のBBBS運動に見られるそれまでにない新しい傾向としては、児童心理学、犯罪心理学者等の専門家の活躍が特筆される。また、よい実践のためのチェックリストとガイドラインが提示されていた。それは望ましいBBの特徴として、忍耐、持続、同情、健康を掲げている。さらにこの時期　広報活動が充実したものになってきた。新聞、ラジオを通じてBBBS運動は広く知られるようになり、広報のための映画も作られた。またこの時期からBB Weekも定められるようになった。

しかしながら、資金難から全国組織は立ち行かなくなり、1937年で全国組織BB/BSFは活動を終える。以後、BBは1946年まで、BSは1970年まで統制する中心組織がないまま、それぞれの地域での活動が継続された[41]。

2）第二次世界大戦後から今日に至るメンタリング運動（1945～1980年代）

大恐慌、第二次世界大戦を経て、BBBS運動は、さらなる発展を遂げていた。BBは　1946年に、13団体から構成されるBig Brother of Americaが結成され、本部はフィラデルフィアに置かれた。この時期、日本においてもBBBS運動が開始されるが、1950年にマッカーサーは、BBBS運動と日本との連関を示唆する発言を残している。Big Brother of Americaの最初の10年に20団体が加入し、次の15年にこれらの33団体は150になり、さらに1960年代末までに4倍に拡大している。

一方のBSについては、1970年にBig Sisters Internationalが結成されている。

1977年には、BBAとBSIの合同によりBBBSA(Big Brothers/Big Sisters of America)が結成され、1983年にはフィラデルフィアに新しい本部の建物が完成した。この時期の活動を支えたのは、運動の組織化であり、専門家による資金調達ならびに組織評価が実施されるようになり、連邦政府の各部局からの補助金も開始されている。

BBBS運動の拡大が図られたこの時期、BBBSは世界的なメンタリング運動の中核となっていく。1980年代当時、社会的資本の劣化が顕著となり、貧困、孤独のうちに成長を余儀なくされている児童の増加、非行問題が深刻化していた。父親のいない家庭で育つ子どもの増加と共に都市における犯罪の増加とトラウマが重大問題となっていた。こうした状況に今やミドルとなったベビーブーマー世代の理想主義、市民的良心を基盤として、各種のメンタリング・プログラムが各地で叢生した。

米国のメンタリング運動は、BBBSを中心に萌芽期（1980年代）、拡大第1期（1988年から1996年）、拡大第2期（1997年以後）を経て今日に至っている[42]。今日のメンタリング・プログラムの約6割が1987年以後に、半数近くが1987年から1995年の間に設立される一方、BBBSのプログラムの過半数が1985年以前に設立され、それ以外のプログラムの大半が1987年以後に設立されていることからも、1980年代後期から各地で急速に拡大したメンタリング運動の主体はBBBS以外の小規模の新設プログラムであり[43]、需要に応じきれないBBBSの補完がメンタリング・プログラムの叢生をもたらしていることがわかる。メンタリング運動は1997年4月にフィラデルフィアで開催された「アメリカの将来のための大統領サミット」（通

称メンタリング・サミット）によって画期を向かえ、2002 年には 1 月がメンタリング月間となり[44]、メンタリングの記念切手も発行された。National Mentoring Partnership が 2002 年に発表した調査結果によれば、米国だけで 4000 以上のメンタリング・プログラムが存在し、250 万人の青少年が一対一のメンタリング・プログラムに参加している。全成人の 34%が過去 12 ヶ月において青少年のメンタリングを行った経験があり、同 11%がメンタリング・プログラムに参加し、99%のメンターはメンタリングの経験に満足し他の人にそれを推奨している。同調査は 5700 万人の成人がメンタリングを行うことを真剣に考えていると推計している[45]。

2004 年には BBBS は百周年記念誌『わずかの瞬間大きな魔法』[46]が発行されている。そこには、これまで BBBS 運動に参加した BB、BS、LB、LS による感謝に満ちた心温まる手記が集められている。

5．結びにかえて

以上、今日のメンタリング運動の中核となっている米国における BBBS 運動の誕生と組織化の経緯を素描してきた。20 世紀初頭にシンシナチーやニューヨークで開始された BBBS 運動は、百年後の 2004 年には 5 歳から 18 歳までの 22 万 5000 人の青少年が参加し、470 機関のネットワークの下、5000 の地域コミュニティで活動がなされている。

BBBS 運動の誕生と発展の素描から、以下のことが読み取れる。第一に、メンタリング、すなわち一対一の個別継続支援（日本においては「ともだち活動」と称される）は、少年裁判所との連携から生まれたが、しだいにその支援対象と活動を広げていった。当初から意識されていたのは、非行防止、非行青少年の保護更正であった。第二に、BBBS 運動と総称されるが、そこにはプロテスタント、カソリック、ユダヤ教等宗派独自の組織もあれば、宗教とは関係しない組織や、それらが合同ないしは合併される場合もあった。BBBS 運動においても米国の建国以来のコミュニティの理想、ならびにコミュニティにおける物心両面での相互扶助の中心としての教会が中心的役割を担い、活動と密接に関連していることが改めて浮き彫りになった。第三に、初期の BBBS 運動を担ったクールターやバンダービルト夫人等は、子どもへの残虐防止協会（Society for the Prevention of Cruelty）においても共に活動していた。子どもへの残虐防止協会等、BBBS 運動がそれ以外の児童支援保護運動とどのように連関していたのか、今後の研究課題となっている。

また、BBBS 運動の組織化については、今日の基本的枠組みは 1920 年代にはほぼ完成していたことが判明し、活動内容についても、百年前にウェストハイマーやクールターが行っていた支援活動の原型である一対一の個別継続支援ならびに専門家によるモニタリングが踏襲され、それに時代や社会の変化に応じた新しい形式や方法が加えられている。そしてそうした原型と新たに加わった要素の共存における様式の違いが、今日の各国におけるメンタリング運動の違いを際立たせているように思われる。例えば、日本と米国とのメンタリング運動の違いは、1980 年代以後米国が新しい社会問題にメンタリングを適用したことにあり、国民性等といった単なる文化差としてとらえることはできないということになる。米国における BBBS の歴史的発展とそれを中心とするメンタリング運動の世界的展開過程の分析は、今日の各地におけるメンタリング運動に関連する異なる事象をその特異性と共に相互に関連性した歴史性を伴っ

た立体として見ることを可能にしている。

注：

---

1) 筆者稿「青少年向けメンタリング・プログラムの構造的特徴と類型」『青少年教育フォーラム』（国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要）第3号2003年を参照。
2) Baker, D. B. & Maguire, C. P ., Mentoring in Historical Perspective, in DuBois, D. L..& Karcher, M. J. eds., *Handbook of Youth Mentoring*, Sage Publications, 2005.
3) Beiswinger, G.L., *One to One: The Story of the Big Brothers/Big Sisters Movement in America*, Big Brothers/Big Sisters of America/Publisher, 1985.
4) 筆者稿「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』（愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要）第11号2003年。
5) ホメロス『オデュッセイア（上）』（松平千秋訳）岩波書店1994年45頁。
6) 例えば、モンテスキュー（1689-1755）はこの書を「神の書」として畏敬し、ロペスピエール（1758-1794）も同書に記された理想国家サラントを建設したいと語ったと伝えられ、人権宣言に繋がる名句に満ちていることも指摘されている。アラン（1868-1951）は学童に読み方を教えるには、『テレマックの冒険』の「健全で、純粋で、親しみやすい」文体が何より適切であると推奨している。朝倉剛「解説」フェヌロン『テレマックの冒険　上』（朝倉剛訳）現代思潮社1969年283-296頁。
7) Macrone, M., *It's Greek to Me!*, HarperPerennial, 1994, p.12.
8) 筆者稿「米英のメンタリング運動と生涯発達支援の革新」『日本生涯教育学会年報』第25号2004年。
9) http://www.census.gov/population。http://www.elderweb.com/history。
10) http://college.hmco.com/history/readerscomp/rcah/html/ah_070900_poverty.htm
11) http://www.digitalhistory.uh.edu/database/article_display.cfm?HHID=205
12) Boyer, P., *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920*, Harvard University Press, 1978, pp.150-155.
13) Freedman, M., From Friendly Visiting to Mentoring: A Tale of Two Movement, in Goodlad, S., ed., *Students as Tutors and Mentors*, Kogan Page, 1995.
14) Cohen, S., Jewish Pioneers in the Big Brothers Movement, *American Jewish Historical Quarterly*, 61(3), 1972, pp. 225-226.
15) Ibid., pp. 225-227.
16) Ibid., p. 227.
17) http://www.jewishencyclopedia.com/view.jsp?artid=511&letter=C
18) ユニテリアン派の神学者。ハーバード神学校に学び、ユニテリアン派教会牧師となったが分離、組合派教会に招かれボストンで説教を続ける。社会問題、神学問題に関する著述をなし、奴隷は意思運動の指導を行う。ロックの感覚主義に反対、超越主義をとる。神が人格であること、人の霊の祈りによって神と交通しうるとした。『岩波西洋人名辞典増補版』岩波書店1981年1011頁。
19) http://www.makeadifferenceusa.org/honoree/coulter.html. Coulter, Ernest Kent, *Dictionary of American Biography*, Supplement Five 1951-1955, Charles Scribner's Sons,1977, pp. 137-138. *New York Times*, May 3, 1952, p.27.
20) White, F. M., How a Boy was Made a Thief and the Fight to Reclaim him, *World's Work*, September 1911.
21) Coulter, E. K., *The Children in the Shadow*, McGrath Publishing Company,1969(1913), p.270.
22) Coulter, E. K., Psychiatric Bunk, *Outlook and Independent*, October 7, 1931, pp.174-175, p.189.
23) Filler, L., Coulter, Ernest Kent, *Dictionary of American Biography*, Supplement Five 1951-1955, Charles Scribner's Sons, 1977, p.138.
24) "Col. Coulter Led Big Brother Drive," *New York Times*, May 3, 1952.
25) Beiswinger,, op. cit., pp.20-23,
26) E.B.S., Big Brothers, *Good Housekeeping*, 1909, p.600.
27) Beiswinger, op. cit., p.24
28) Savage, C., Wanted—Big Brothers!, *Good Housekeeping*, August 1917, p. 125.
29) E.B.S., op. cit., p. 600.
30) Savage, op. cit., pp. 57-58.
31) Ibid., p.58.
32) E.B.S., op. cit., p. 600.
33) Savage, op. cit., p. 58.
34) Ibid., p.125.
35) Cohen, op. cit., p.229.
36) Savage, op. cit., p. 125.
37) *New York Times*, April 29, 1913.

38) Cohen, op. cit., p.228.
39) Beiswinger,, op. cit., p.82.
40) Ibid., p.84.
41) Ibid.
42) 渡辺かよ子「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』(愛知淑徳大学) 第 11 号 2003 年を参照。
43) Sipe, C. L. & Roder, A. E., *Mentoring School-age Children : A Classification of Programs*, Public/Private Ventures, Winter 1999, Table 1.
44) http://www.whitehouse.gov/news/releases/2002/01/20020118-3.html、2003 年 1 月 30 日参照。
45) National Mentoring Partnership, Mentoring in America 2002. http://www.mentoring.org./common/one-report、2004 年 3 月 15 日参照。
46) Barrett, B. et al. eds., *Little Moments Big Magic*, Magical Moments Publishing, 2004.